
roach with one step ,two steps, three steps

豆吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Approach with one step, two steps, three steps

【Nコード】

N8095Y

【作者名】

豆吉

【あらすじ】

武内苑子の片思いの相手は、2番目の兄の後輩である内藤駿介。基本無愛想で無口な駿介と同年代の男の子がちよっと苦手でオクテかつ人見知りな苑子。この二人の距離が近づいてく過程を書く予定です。

「泰斗高校恋愛事情シリーズ」第2弾です。

第1弾”図書委員会の恋愛事情”の中に掲載されている「武内苑子の」で始まるタイトルの続編にあたります。第1章の頭に簡単に

今までの流れを書いています。 ” 図書委員会 ” を読むと詳しく書いてあります。

第1章.. おまけの誘い (前書き)

前作”図書委員会”で長くなりそうなので、独立させるとお知らせした武内苑子の恋愛話です。

お待たせしましたって・・・書いていいのかな。

第1章.. おまけの誘い

私は武内苑子です。泰斗高校の1年生です。最近、兄のおかげで知り合った専心館高校3年生の内藤駿介さんは、入学して間もなくの連休明けの通勤ラッシュで私を助けてくれた人でした。

顔を見るだけでラッキーだったのに、思いがけず兄のおかげで知り合ったあの人は、寡黙だけど優しく、初めは1年生の私にも敬語だったけど文化祭の頃には普通に話してくれました。

最初は、ちょっと関わられただけで嬉しかったのに、私は、もっと近づきたいと思ってしまうのです。

欲張りです、私。

今日は泰斗祭の振替休日。部屋でのんびりしていた私のところに、聡太お兄ちゃんが顔を出した。

「苑子、来週の日曜日は空いてるか？」

聡太お兄ちゃんから渡されたのは、20枚ほどの食券と書かれた紙。

「へ？」

「来週の専心祭の食券。やるから、来週俺につきあえ」

「えっ！なにそれ。」

「内藤が「妹さんと一緒にどうですか」ってくれたんだよ。俺がOBでなおかつ内藤の先輩でよかったなあ！！苑子」

「えーっ！！」

（お兄ちゃんメインだけど）内藤さんが専心祭に招待してくれた！！！！どうしよう。なにを着て行ったらいいのかな。学校行ったら、樹理ちゃんに相談しなくちゃ。

お昼休みに樹理ちゃんに昨日の件を相談したら「制服にしときなさ

いよ。迷子になっても分かりやすいから」とアドバイスされた。

でも、迷子って・・・「樹理ちゃん。私が迷子になること前提？」
樹理ちゃんは「あはは、ごめんごめん。でもさ、目印になるから内藤さんも探しやすいとおもうけど?」と笑う。

内藤さんが探しやすいとな?なぜ、内藤さんがここに。私は思わずきょとんと樹理ちゃんを見てしまった。

「内藤さんって、食券だけ渡して放り出すような人?違うでしょ。きつと案内してくれると思うけどなあ。苑子!!これはチャンスだよ。がんばんな!!」

「そうくんがメインで、私はオマケなんだけど・・・」でも、でも・・・内藤さんが案内してくれる可能性があるのかな。

「何がチャンスなの?」と、突然男の子の声がした。

座っている私たちを見下ろすように、高野くんがパンの袋を持っ
て立っていた。

「ちょっと高野くん。急に現れないでよっ」

「ごめん。チャンスって、何のチャンスなんだろうと思って」

「あの、高野くん。チャンスっていうのは私の話で、樹理ちゃんに
は相談に乗ってもらってるだけなの。だから、気にしないでいいよ
?」

「え・・・。武内さんの?そうなんだ・・・」高野くんは、なん
だかちょっとへこんで、友達のほうへ歩いていった。

「樹理ちゃん。高野くんがへこんでたみたいだね。」

樹理ちゃんに言うと、樹理ちゃんは高野くんのほうをチラッとみ
て「ふん。この程度でへこむなんて・・・やっぱりダメだわ」とボ
ソツと言った。

「何がだめなの?」私が聞くと、樹理ちゃんは「ん?苑子は気にし
なくていいんだよ。それより、苑子。専心祭の報告、楽しみにして
るからさ」と、素敵な笑顔でサラッと言った。

第1章.. おまけの誘い（後書き）

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

ストックが少したまりましたので、UPしてみました。

この作品でも、聡太は暗躍（笑）の予定です。話には出てくる、長兄・伊織も登場させたいなあ〜と思っています。

第2章：専心祭－1（前書き）

苑子、へこんだり浮上したりする。の巻。

第2章：専心祭―1

結局、私は制服を着て専心祭に行くことにした。

私は、いつになく何度も玄関の鏡の前で制服を見直した。髪の毛、OK。おろしたての紺色のハイソックス、OK。前日によく磨いた靴、OK。制服、リボン（ちなみに1年生はモスグリーンだ）、スカートのプリーツ、OK。

聡太お兄ちゃんに、現場を見られて「苑子、気合入ってんなあ」と笑われてしまった・・・恥ずかしい。でも、内藤さんが案内してくれる（勝手に想像）かもしれないんだから、どうしても気にしてしまう。

途中で、聡太お兄ちゃんが剣道部への差し入れを買うのに付き合っている、開始時間すこし過ぎた頃に専心館高校に到着。

「こんにちは、聡太先輩、武内さん」人で混み始めた正門に、内藤さんが立っていた。

「こ、こんにちはっ。」私はどぎまぎしながら、お辞儀をした。

「あれ、どうした内藤。彼女と待ち合わせか？」聡太お兄ちゃんが不思議そうに尋ねる。

彼女・・・そっか。内藤さんに彼女がいてもおかしくないよね・・・私は、なんだか急に気合を入れた自分が恥ずかしくなってしまうった。

「俺、彼女いませんから。先輩たちを案内しようと思って待ってたんです。先輩のことだから、混みあう前にくるかと思って・・・正解でしたね」と内藤さんが笑う。

「お。そうか。悪いなあ。俺はよく知ってるけど、苑子は知らないからな。助かるな。」

「内藤さん、ありがとうございます」私も聡太お兄ちゃんにならうとお礼を言う。

すごい、樹理ちゃんの予想が当たったよ!! あと、彼女いないって言ってた・・・一転、私は気持ちが高揚していく。

「じゃ、まずは剣道部に行くか。差し入れ持ってきたからな」聡太お兄ちゃんがビニール袋を持ち上げた。

「ありがとうございます。剣道部は今年、ポップコーン売ってるんですよ」

「昨年も、ポップコーンだったよな。俺、売った覚えがあるんだけど」

「昨年は塩だけでしたけど、今年は味が増えました。メープル味と塩の2種類です・・・武内さん、好きな注文していいからね」

「は、はいっ。ありがとうございます」急に内藤さんに話しかけられて、動揺してしまった。挙動不審に見られたら、どうしよう。

正門から校舎入り口に続くメインの通路沿いに様々な模擬店が並んでいる。

剣道部は、ちょうど真ん中に模擬店を出していた。

聡太お兄ちゃんが顔を出すと、2年生や3年生（と思われる）は、「聡太先輩。お久しぶりです」と次々と挨拶していく。1年生も、先輩に続いて挨拶していく。

挨拶してきた部員に、聡太お兄ちゃんは、私を「妹だ。泰斗の1年生なんだ」と紹介するんだけど・・・みんなの視線がなんか、がっかりしているみたい。

確かに、これといった特徴のない外見だからなあ・・・お兄ちゃんたちは、父に似て端正で精悍な顔立ちしてるから、母似の私とあんまり似てない。

やっぱり、内藤さんも私が残念な妹だと思っているのかな・・・そう思って内藤さんをチラリと見ると、私の横にいた内藤さんと目が合ってしまった。

「どうしたの？」内藤さんが不思議そうに聞く。

「い、いえっ。兄って剣道部で慕われてるんだなあ、と思って。」

「聡太先輩は、稽古中は厳しいけど普段は気さくだからね。家でも、あんな感じ？」

「うーん・・・家では、いつも伊織兄さんにやられっぱなし、かな」私は家での聡太お兄ちゃんを思い出してしまった。

「伊織さんって、どんな人？」内藤さんは、私たちの話しによく出てくる伊織お兄ちゃんに興味をもったみたいだった。

「優しくて頼りになる兄です。小学生の頃、私が男の子に泣かされると、必ず伊織兄さんがなぐさめてくれて。宿題や受験勉強もみてくれました。」私を泣かせた男の子は、翌日からちょっかいを出さなくなっただけ、なぜか怯えているように見えた。

「へえ。」

「優しいのは苑子にだけ。伊織兄さんは、苑子には激甘。」いつものまにか挨拶が終わったらしく、聡太お兄ちゃんが内藤さんとの会話に割り込んできた。

「さ、あちこち見て回ろうか。苑子、ポップコーンはあとで買ってやるから我慢しろよ？」

「そうくん!!」もー、まるで私がお腹すいて我慢できないみたいな発言は止めてほしいっ。

第2章：専心祭－1（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

第2章から気持ちを自覚した苑子の一喜一憂が始まる・・・はずです。

一 2 (前書き)

ベタなごまかし。の巻

体育館で男子体操部の男子新体操を見て（このためだけに、器具を購入してあるそうだ）、模擬店で食券を使いながらぶらぶら見て回り、午後2時頃には最高潮に混み始めた。

人混みがきらいな聡太お兄ちゃんは「苑子、ポップコーン買ったら帰るぞ」と言い、私も緊張で疲れ気味なので、賛成した。

内藤さんも、3時から当番だそうで、帰るにはちょうどいい時間かも。

「じゃあ、ポップコーン買いに行きましょうか」と内藤さんが言うのと、聡太お兄ちゃんが「俺は、正門で待ってるから、苑子だけ並んでこいよ。俺はもう、並ぶのはいやだ。内藤、悪いけど苑子を正門まで連れてきてくれよ」と言い出し、さっさと正門まで行ってしまった。

「ちょっと、そうくん！！もう、信じられないっ！！」私は、聡太お兄ちゃんの行動に啞然とした。

妹だからって、扱いが雑だよ！！バカ聡太！！ぜーったい伊織お兄ちゃんに言う！！

伊織お兄ちゃんに、お説教されればいいんだ。もうっ！！

内藤さんも、聡太お兄ちゃんの行動に呆然としているみたいだ。

「す、すいません。兄が・・・あの、内藤さん。私一人で行けますから、いいですよ？」

なんか、私いつも、内藤さんにお兄ちゃんの行動で謝ってない？？

私が謝罪すると、内藤さんは「あの人は・・・強引だ・・・」とボソリとつぶやいたあと、私を見て

「聡太先輩の、ああいう行動は何か考えがあるんだと思うよ。・・・きつと。」とフォローしてくれる。

「ほんとに、すいません・・・」

「俺、時間はあるから。武内さんは気にしないでいいよ。」

「内藤さんも、3時から販売に回ると聞きました。」

「そう。でも、俺、愛想がないから販売苦手なんだ。」内藤さんが苦笑い。確かに、内藤さんって苦手そうな感じがする……。

「私は内藤さんのそういうところも、好きです」

「え」内藤さんが聞きかえす。

私、今……何言った？

私……告白っぽいこと、言った？？

「え、えーと、ポップコーンが好きですって言ったんです」慌てていいつくろう。

「そっか。昨日、試食したんだけど結構美味しいよ。聡太先輩の妹だから、おまけしてあげるね」

よかった、周囲が騒がしくて、内藤さんには聞こえてないみたい。でも、言葉に出して自覚してしまった。私、内藤さんが好きなんだ。

何事もなかったように、メープル味のポップコーンを購入した私は、内藤さんと一緒に正門で待っている聡太お兄ちゃんのところへ行った。

聡太お兄ちゃんは私の横にいる内藤さんを見て、なぜかニヤリとして内藤さんに何か話していた。内藤さんは、なぜかちょっと慌てた様子になり、聡太お兄ちゃんはそんな内藤さんの肩をたたいていた。

その後、私は、むやみにご機嫌な聡太お兄ちゃんの様子を不気味に思いながら帰ったのだった。

— 2 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

うおー、ベタだ、ベタだよ。

読んでいただいてる方にドン引きされたらどうしよう。

(自分で書いておいて言うのもなんですが)

次回は、聡太サイドの話になります。

一 3 :: 武内聡太の観察（前書き）

聡太は見た！の巻

一 3 : 武内聡太の観察

泰斗祭から数日後、「聡太先輩、来週の専心祭の食券もらったのですが、妹さんと一緒にどうですか」と内藤から食券の束を渡された。

「苑子と？」内藤がこんなこと言うなんて珍しいな。

「はい・・・この間のお菓子のお礼ということで。」

「あゝ、あのケーキか」確かに、苑子の作るお菓子はうまい。ちなみに料理も美味いぞ。しかし、俺はあれから苑子の家庭教師と化している。ケーキの代償はでかった。

「はい。」

「本人に美味かったって伝えてやれよ。電車で会うだろ？」

「い、いや・・・それはちよつと・・・」うわー、内藤が動揺している???

苑子は、本人が鈍いので自覚してないだろうけど、第三者から見ると内藤の事が好きなんだろうというのは丸分かり。

俺としては、妹に好きな男が出来たというのは何だか複雑な気分だけど、妹は見る目があるじゃん、とも思っている。無愛想で無口な奴だけど、内藤は信頼できる人間だからだ。

以前、内藤が苑子のことを「小動物みたいで面白い」って言うたけど、この動揺ぐあいは認識を改めたんだろうか。気になる。

俺は目の前で「と、とにかく。食券をお渡ししますから来てください」と焦り気味の内藤が、何だか面白いので、俺は「ありがとう。苑子を連れて差し入れを持っていくよ」と受け取った。

苑子は出かけるまえのチェックに余念がない。俺たちと出かけるだけのときは雲泥の差だ。兄ちゃんは少し複雑だぞ。

専心祭に行くと、内藤が正門で待っていた。まあ、内藤の性格からして券を渡しただけで終わりってことはないだろうと思っていた

けど、正門で待っていたのには正直驚いた。剣道部の模擬店に向かうまでの間、二人と会話をしていた気がついた。いつの間に、内藤は苑子に話しかけるときの敬語をやめたんだろう。

その後も、苑子を見る剣道部の後輩に対しての、内藤の視線の厳しいこと。苑子に話しかけようとする部員たちが、皆ひるんで俺に挨拶し、苑子をチラッと見て持ち場に戻っていく。

その後も、内藤は苑子が人にぶつかりそうになると、さりげなくかばったりして、本当に伊織兄さんみたいだった。もしかして、内藤って伊織兄さんみたいなタイプか・・・守りたいものにはとことん過保護になるタイプ。一度、二人を会わせてみたいけど、同族嫌悪か類は友を呼ぶかどっちになるだろう・・・。

だいぶ混雑してきたのと、内藤の当番の時間が迫ってきたので、俺たちは家に帰ることにした。その前に、俺は苑子だけをポップコーンを買に行かせる。苑子はぶうぶう言っていたけど、俺には俺の思惑があるんだ。

戻ってきた苑子は相変わらず俺のことを勝手だと怒っていたが、内藤は俺がわざと二人きりにしたのに気づいたみたいだった。

苑子に聞こえないように「お前さ、剣道部の連中が苑子に話しかけようとするのを、邪魔しただろ」と内藤に言った。

「えっ。なんで知って・・・」内藤はちよつと焦って口をつぐんだ。「いくら心配だからって、お前、過保護すぎ。」

「・・・そうでしたか？」試合のときの鋭さなんて今の内藤には微塵もないな。こいつも普通の男だったか。

「それとも、小動物から別のものに変わったか?・・・ま、苑子が付き合う相手は、俺はお前ならOKだけど、伊織兄さんの攻略法は一緒に考えてやるからさ。」と俺は内藤の肩をたたいた。

内藤が戸惑うのをよそに、俺はなんだか楽しくなってきたってしまった。苑子と内藤が付き合うことになったときの、伊織兄さんが見てみたいもんだ。

その後、俺は苑子から「なんで、そんなに機嫌がいいの？ 気持ち悪いなあ」と不気味がられてしまった。

一 3 ∴ 武内聡太の観察（後書き）

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

「家〇婦は見た」ならぬ聡太は見た、です。

第3章：自分でがんばる―1（前書き）

苑子の奮起。の巻―その1

第3章：自分でがんばるー1

季節は冬休みがあと1ヶ月というときに、私は内藤さんの誕生日を知った。

知ったきっかけは、いつもの朝の電車でのこと。

私は毎年、兄たちの誕生日にケーキを焼く。私がケーキを焼くようになってから毎年恒例になっていて、5月は伊織お兄ちゃん11月は聡太お兄ちゃん。そして1月の私の誕生日には兄二人がプレゼントをくれる。ちなみに、昨年もらったのはムーミンキャラクターのマグカップとプレートだ。北欧特集のテレビを見ていて、「あのマグカップ、かわいい」って言っていたのを聡太お兄ちゃんが聞いていたらしく、私に内緒で用意してくれていた。

こんな話をしていたら、内藤さんが「俺は来月誕生日なんだけど、今年は勉強だなあ」と言った。

「あ、あの。」

「どうしたの？」

「えっと……」誕生日教えてください……と言いかけたところで、私の降りる駅に到着してしまい、私は内心がつくりしながら、内藤さんに挨拶して電車を降りたのだった。

誕生日……聞けなかった……聡太お兄ちゃんなら知っているかな。帰ったら聞いてみよう。

家に帰って、夕飯後に私は柿とバナナをいれたカップケーキを焼き始めた。お菓子も料理も作っていると気分が楽しくなってくるから不思議。

オーブンに入れて、ケーキが膨らんでくるのをみるのは至福のときだ。

「学校で、樹理ちゃんと食べよう♪」私は焼きあがりに満足した。「お。なんかいい匂いがする」と聡太お兄ちゃんがキッチンに顔を

出した。

「そうくんの誕生日に焼くケーキの試作を試してみたの。」

「お。そっかー、柿とバナナ？へー、面白いものを入れるんだな。」

「そうくんは、今年の誕生日当日は彼女さんと出かけてたよね。今年もそう？」

「今年は、当日でいいよ。」聡太お兄ちゃんがサラリと言った。

「ふうん。わかったよ」・・・ほろ苦いチョコレートケーキでも焼いてあげようかな。

なんてしみりしたけど・・・当の聡太お兄ちゃんは、焼いたカップケーキに手を出して「苑子」。これ美味しいな！俺、ケーキ、これがいい！」と嬉しそうだ。

・・・なんか、気を使わなくていいらしい。

それに、今なら内藤さんの誕生日が聞ける。

「ねえ、そうくん。・・・内藤さんって誕生日いつ？」

「は？内藤の誕生日？」ケーキを食べ終えた聡太お兄ちゃんは一時不思議そうな顔をしたものの、次になぜか、ニヤニヤしはじめた。

「そうくん、笑顔が気持ち悪いよ」

「失礼な・・・ふうん、内藤ね・・・いいんじゃないの？」

「知らないならいいよ」

「クリスマスだよ」

「へ？」

「だから、内藤の誕生日はクリスマス。毎年ケーキがクリスマスケーキと一緒に嬉しいぞ・・・あげたら喜ぶだろうねえ・・・なんなら、かわいい妹のために内藤を家に呼んでやろうか？」

「だ、だめっ。クリスマスなんだから、内藤さんも用事あるだろうし・・・勉強の邪魔しちゃ悪いし・・・」

「・・・一日くらいの息抜きで、ダメになるくらいの勉強なんか、あいつはしてないと思うけど？」

お兄ちゃんに頼むと、用事がない限り内藤さんは家に来てくれる

けど・・・でも、やっぱり自分で決めたことだから、自分で頑張る。

「ううん・・・、私、自分で頑張る」

「お。・・・そうか。」

ちよつと、聡太お兄ちゃんが寂しそうに見えたのは、気のせいかな。

第3章：自分でがんばる－1（後書き）

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

苑子が一人でがんばると決意して、聡太はちょっと寂しいらしい。ところで、柿（完熟したもの）とバナナをつぶしてホットケーキミックスに混ぜると、甘めのパンになります。

○ツクパッドで見つけたレシピにバナナを加えてみたのですが、簡単にできて美味しかったです。

一 2 (前書き)

苑子の奮起。の巻―その2

今朝、日直なので内藤さんと会う1本前の電車に乗った。日直だからしょうがないけど、内藤さんと話をしない日は、なんか寂しい。この日は、聡太お兄ちゃんに頼まれて私は駅前の大きな本屋に立ち寄っていた。取り寄せた本が入ったと連絡をもらったものの、兄はバイトで行けないらしく、私が頼まれた。

この本屋の参考書売り場で、内藤さんにバッタリ会ったんだよなあ。あの時はまさに「盆と正月がいつぺんに来た」だった・・・。聡太お兄ちゃんに頼まれた本を受け取り、私は時間もあるので本屋の中を見て回ることにした。

本屋の中もクリスマスにちなんだコーナーが出来上がってて、絵本やお菓子の本、編み物の本なども置いてある。そこで、私は目についたお菓子の本を手にとった。

ブッシュ・ド・ノエル、チョコレートケーキ、イチゴのケーキ・・・うう、どれも美味しそう。いろんなカップケーキを作るのも楽しそう・・・本に熱中していると、隣から「武内さん？」と声をかけられた。

声のした方向に顔を向けると、そこには内藤さんが立っていた。

「な、内藤さん。偶然ですねっ」

「ちょっと、本を見に来たんだ。武内さんは？」

「私は、聡太兄さんが取り寄せた本を受け取りに。クリスマスコーナーがあったので、ちょっと立ち寄ってました」

「そのお菓子の本にすごく熱中してたね」と内藤さんが笑う。・・・そんなに熱心に見てたか、私。恥ずかしい。

「その本、買うの？」

「え、えーと。きよ、今日は見にきただけですっ。」

「・・・じゃあ、一緒に帰らない？ なんか前もこういうことあっ

たよね。」

このまま一緒に帰ってもいいけど・・・もう少しだけ。

「あ、あのっ。時間があったら暖かいものでも飲みませんか？」私は、断られるのを覚悟して、誘ってみた。

内藤さんは、ちよつとびくりしたみたいだけど「それもいいね」と賛成してくれた。

ショッピングモール内にあるカフェで、私はロイヤルミルクティー、内藤さんはコーヒーを飲む。

「あの」

「ん？」

「兄から、内藤さんの誕生日を聞きました。12月25日、クリスマス生まれなんですね」

「うん、そうなんだ・・・ケーキと一緒に、プレゼントもちよつと豪華だけど一緒。小さい頃はイヤだったなあ」と内藤さんは苦笑い。

「それで・・・その・・・」

「うん、どうしたの？」

「あの・・・ケーキを焼いてもいいですか？」

「え？」

「あの・・・日ごろ、兄がお世話になってるし。専心祭では案内してもらったし・・・お、お礼として」

「お礼なんて、別にいいのに」

「い、いいえっ。そういうわけには・・・迷惑なら言ってください。」

「・・・迷惑じゃないけど、大変じゃない？」

「いいえっ。大変じゃないです！」思わず私はムキになってしまった。

お店の人がこちらを見る・・・なんか、今日は恥ずかしいところばかり、内藤さんに見られてる。

「そ、それで。できれば、そのう、当日にお渡ししたいんですけど・
・あの、都合はいかがですか」

「俺は、家にいるから大丈夫だけど・・・クリスマスは武内さんに
予定はないの?」

「夜に伊織兄さんが帰ってくるくらいで・・・特にないです。じゃ、
じゃあ・・・あのっ。25日に渡しに行ってもいいですか?」

「え。家に?・・・・うーん・・・家、その日俺のほかには兄貴
と弟が家にいるから、武内さんびっくりしちゃうと思うよ。だから、
外で待ち合わせでもいいかな」

「は、はい。あの、それじゃあ、メルアドを教えてもらってもいい
でしょうか」

「え?」

「あ、あの。待ち合わせ場所とか決めるとかに、必要だと、思って・
・」

「あ、そ、そうだね。」 私たちは、お互いにあたふたしながら、メ
ルアドを交換した。

私は初めて父親と兄たち以外の男の人のアドレスを登録したのだ
った。

— 2 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

この回は待ってるばかりじゃダメだと苑子が動きました。

第4章：クリスマスまでの過ごしかた。（前書き）

苑子の過ごし方。の巻

第4章…クリスマスまでの過ごししかた。

冬休みが間近になって、内藤さんは自由登校になっていた。朝に電車で会話ができなくなったけど、メールのやりとりをするようになった。

私たちも、期末が終わってあとは冬休みを待つばかりなので、結構気楽。

週明けの昼休みに、樹理ちゃんにメルアドを聞いたこととクリスマスにケーキを渡すことを話をしたら「すごい！苑子、頑張ったね」と自分のことのように喜んでくれた。

「ありがと、樹理ちゃん。私、がんばる」

「うん、がんばれ。で、どういうケーキを焼く予定なの？」

「甘すぎるお菓子は苦手ってメールに書いてあったから、甘さ控えめのケーキを焼こうと思って。それでね・・・」と私はカバンから袋を出した。

「何種類か焼いたんだけど・・・一緒に食べてみてほしいんだ。」

「おおっ。苑子のケーキ、久しぶり。」

「最初、そうくんに食べてもらおうかと思ったんだけど、そうくんって、何食べても美味しいしか言わないから、わからなくて。ごめんね、樹理ちゃん、実験ばいにつき合わせちゃって」

「何言ってるのよ、苑子のケーキは美味しいからいくらでも付き合うって」

樹理ちゃんは早くも、どのケーキにしようか迷っているみたいだ。

「このケーキ、どうしたの？」高野くんが、樹理ちゃんが選んだケーキに目を留めた。

高野くんって、樹理ちゃんがいるところによく顔を出すけど・・・
・やっぱり樹理ちゃんのこと、好きなのかなあ。

「高野には関係ないよ」と樹理ちゃんはそっけない。

「あ、あのね、高野くん。樹理ちゃんに試食を付き合ってもらってるの」

「試食？」

「う、うん。私が焼いたんだけど・・・」

「武内さんが焼いたの？」

「そうなの。」

「苑子が彼氏にあげるのは何がいいか考えてるんだよね」樹理ちゃんがニヤリと笑った。

「樹理ちゃんっ！」私は顔が赤くなってしまい何も言えない。内藤さんが彼氏になったら、どうしよう。ひゃく！！

「彼氏・・・武内さんに？」

いかにも意外という顔のあと、なぜか急にがっくりした顔をして高野くんは立ち去っていった。

「高野くん、どうしてあんなにがっかりしたんだろ？・・・ていうか樹理ちゃん。内藤さんは彼氏じゃないし！」私は周囲に聞こえないように樹理ちゃんに言った。

「そうになったら、嬉しいでしょう？」

「・・・嬉しい」

「素直でよろしい。」樹理ちゃんは、何事もなかったように“どのケーキから食べようかな”とケーキを選び始めた。

第4章：クリスマスまでの過ごししかた。（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

前回、苑子の押しで少し進んだ（？）二人がそれぞれクリスマスを迎えるまでの話です。

次回は内藤サイドです。

（駿介サイド）（前書き）

駿介の過ごし方。の巻

（駿介サイド）

俺の誕生日はクリスマスだ。小さい頃は兄や弟は誕生日ケーキとクリスマスケーキを食べ、プレゼントも2個ずつもらえるとというのに自分はケーキは一つだし、プレゼントもちよつと豪華とはいえ、一つ。この不公平感がどうしても納得できなくて俺はクリスマスがあんまり好きじゃない。

12月25日は「メリークリスマス」と「しゅんすけくん たんじょうびおめでとう」のチョコプレートがついたケーキを母が購入するため、ますます自分の誕生日だけが扱いが雑な感じがして余計にクリスマスが好きじゃなくなった。

俺の誕生日がクリスマスだと聡太先輩に教えてもらった武内さんから、ケーキを焼いて持って行きたいと言われたとき、俺は驚いた。思い立ったら即行動の聡太先輩とは違って、おっとりしてるんだなあ、と思っていたけど、やっぱり聡太先輩の妹だ。先輩ほど策士で強引じゃないけど意志の強さは似ている。

以前に食べたケーキも美味しかったし、間違いなく焼いてくれるケーキも美味しいに違いない。

それに、あの小動物みたいな武内さんをむげに断るなんて、俺には出来ない。武内さんを見ると、弟・裕介が以前に飼っていたハムスター“ハムすけ”を思い出す。ちなみに名づけセンスのなさは兄弟共通だ。

武内さんは聡太先輩や伊織さんが男の基準と刷り込まれているように、俺のことはそんなに苦手ではないみたいだけど、家に来て孝介兄さんや裕介に会ったら驚かれそうなので、外で待ち合わせをすることにした。

話の流れでメルアドも交換することになり、俺はとっくに消した高1の頃少しだけ付き合った女子らしい久しぶりに自分の携帯に女

の子のアドレスを登録したのだった。

その夜、さっそく武内さんからメールが届いた。

「こんばんは。さっそくメールをしました。ケーキについて好みを伺いしてもいいでしょうか」

ケーキの好み……。前にもらったキャロットケーキは美味しかったな。が、ケーキの種類言はよくわからない。ただ、生クリームとか、甘すぎるのは苦手なんだよなあ。ケーキを食べるのに向き不向きがあるなら、俺って絶対向いてないと思う。

とりあえず、「こんばんは。内藤です。甘すぎるお菓子は苦手です」と送信した。我ながら、愛想のない文章だよなあ……。

携帯を見ながら、考え込んでいる俺は相当に変だったらしく、兄・孝介が「駿介。携帯見ながら何考え込んでんだ」と不審げに俺を見ていた。

「別に……」これ以上ここにいと、そのうち携帯をのぞきこまれそうなので俺は自分の部屋に引き上げた。

部屋で受験勉強をしながら、ふと考えたのは武内さんのこと。

どんなケーキ焼いてくれるのかなあ……。俺の返信内容を見て、甘すぎないケーキについて考えているであろう武内さんがなんとなく想像できて、今年はクリスマスが楽しみになってきた。

（駿介サイド）（後書き）

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

駿介は3兄弟の真ん中です。

第5章…クリスマスの風景－1（前書き）

苑子のお願ひ。の巻

第5章…クリスマスの風景―1

樹理ちゃんにも試食を協力してもらった結果、紅茶とチョコレー
トのケーキを焼くことにした。私はアールグレイが好きなんだけど、
あの香りが苦手な人もいるからダーズリンを入れることにした。

前日に、内藤さんからメールが来た。今まで、私が先に送って内
藤さんが返信するばかりだったから、「内藤さん」のメール受信を
見てどきどきしてしまった。

「明日の待ち合わせは、14時にあの本屋の前でどう？」

「わかりました。」シンプルなやりとりだけど、私の心は舞い上が
りっぱなし。

クリスマスに片思いでも好きな人と約束があるって、なんだか幸
せだ。

私が本屋に到着して、程なく内藤さんも現れた。外は寒いので、
以前に二人でお茶をしたカフェに行くことにする。

それぞれ注文を終えたので、私は紙袋を内藤さんの前に置いた。

「あの、これ・・・紅茶とチョコレートのケーキです。お口に合え
ばいいんですけど」

「ありがとう。武内さんの作るケーキは美味しいから食べるのが楽
しみだな。」

「そういう風に言ってもらえてうれしいです」

会話が途切れる。

ちょうど、各々注文したものが来たので、私たちは黙って飲み物
を飲んだ。

内藤さんと一緒のときは沈黙が続いても全然平気。

「武内さんに、ケーキのお返しをしないとね。」内藤さんが口を開
いた。

「お、お礼なんて、気にしないでください！」

「でも、もらいっぱなしだから悪いし。あ、武内さんの誕生日はいつ？」

「1月です」

「ちょうど試験だなあ」

「ですから、気を遣わなくていいですよ？」

「受験が終わったらになるけど、誕生日プレゼントを贈るよ」

「・・・あ。じゃあ、お願いがあるんですけど」

「ん？」

「内藤さんが、合格したら私にも教えてください」

「え？」

「ダメですか？」

「それは構わないけど、それだけでいいの？」

「はい」

「わかった。でも誕生日のプレゼントも渡したいから、何かほしいものってあるのかな」

“じゃあ、私と付き合ってください”なんて言えないし・・・。

「じゃあ、内藤さんの合格を教えてくださいましたら考えますね」

「受かること前提かあ・・・武内さんも言うね」

「す、すみません」

「こりゃあ、絶対合格しないとね」真っ赤になって謝る私を見て、内藤さんが笑った。

カフェでしばらくおしゃべりをしたあと、久しぶりに同じ電車に乗った。

「ショッピングモールに巨大ツリーがあるんですけど、見ましたか？」

「でかいよね。いつも予備校の行きかえりに通りかかると見上げちゃうんだよ」

「私も、いつも見上げちゃいますよ。」

「予備校が終わるとね、ツリーが光ってるんだ。で、昼間にツリー

の説明看板をみたわけ。そしたら8時から10時までライトアップしてゐるんだって。」

「そうなんですか。知らなかったです」

来年は、内藤さんと見られたらいいな。

第5章：クリスマスの風景－1（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

ケーキをわたして、少しだけ一緒に過ごす二人です。

一 2 (前書き)

伊織、登場。の巻

ケーキを渡したことを樹理ちゃんに電話で報告し、なんとなく伊織お兄ちゃんの話になった。

「伊織さん、彼女とクリスマスは過ごさないのかなあ。」

「昨年、“おりくんもクリスマスは彼女と過ごせばいいのに”って言ったら“苑子は俺に帰ってきてほしくないのか”って、ずーっと鬱陶しかったから、家では禁句だよ」

「……うわー。鬱陶しいイケメン……やだなあ」

「おりくんがイケメンかどうかは知らないけど、ずーっとネチネチ言われるんだよ。鬱陶しいよ。」

「そういうことを伊織さんに言えるのは、苑子だけだよ」

「そう？ 樹理ちゃんが言っても大丈夫だよ」

「……ムリ。あ、そろそろ伊織さん帰ってくる時間じゃない？」

「あ。そうだ。じゃあね、樹理ちゃん」と私は電話を切った。

なんだか知らないけど、私の周囲では伊織お兄ちゃんって恐れられている。普通に優しいお兄ちゃんなのに。

「ただいま。外は寒いー」黒いマフラーをぐるぐる巻きにし、若干メガネを曇らせた伊織お兄ちゃんが帰ってきた。

「おかえり、おりくん」と私が玄関で迎えると、「おー、苑子！ 久しぶりだなあ。高校楽しいか？」と夏休みのときと同じことを言う。聡太お兄ちゃんに対しては、「よお、聡太」と一言だけ……いいのかな。

「さて、苑子。成績表を見せて。」

「う……うん」

伊織お兄ちゃんが、長期休暇で帰ってきてまずすることは、私の成績表チェックだ。お父さんもお母さんも「帰ってきてすぐ見なく

ても。苑子もがんばってるし」って、言ってくれるんだけど、「プロセスより結果が大事だからね。」と一蹴した。

「……夏休みよりは数学の成績も上がったようだね。」成績表のチェックが親より厳しい……。

「分からないところは、そうくんに教えてもらってたから。そうくんのおかげだよ」

「そうか。じゃあ、これからも俺がいなときは、聡太に勉強を見てもらおうようにね」と、伊織お兄ちゃんが成績表を閉じた。

あとは寝るだけになって部屋に戻ったとき、携帯がメールを受信しているのに気がついた。

「ケーキ美味しかったよ。一人で食べようと思ったら兄と弟に見つかってしまい、兄弟で食べました。」

カップケーキ4個渡してるんだけど。一人一個として、残り1つはどうしたのかなあ……。

「メールありがとうございます。遅い時間にすみません。4個あったはずなのですが、残り1個は内藤さんは食べることができましたか？」

というメールを送ったら、すぐに返信がきた。

「もらってきた者の権限を使って、俺は2個確保」これにVサインの絵文字がついてきた。

思わず「絵文字、使うんですね」と返信してしまった。

すると「いつもは使わないんだけど、使ってみました」と今度はお辞儀してる絵文字。

今まで、何度かメールのやりとりをしても絵文字を使わなかった内藤さんが使ってる。

またひとつ、内藤さんの新しい一面を見つけた気がした。

— 2 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

長兄・伊織を登場させました。・・・さて、どうしようかな。
次の話は、内藤家でケーキをめぐる話です。

— 3. その頃の内藤家。 — 1

武内さんと別れて、家に戻ってくると大学生の兄・孝介と、高校1年の弟・裕介が家で対戦ゲームをしていた。

俺の家は、父親の転勤に母親がついていってしまい、年末まで戻ってこない。

必然的に家事は兄弟で分担することになり、ローテーションを組んで、炊事、共有スペースの掃除、洗濯をこなす。各々の部屋は各自と決まっている。

母親が「男子は家事ができて当たり前」の人なので、今の生活も困らないのは助かる。

「ただいま」と居間に顔を出すと「駿兄ちゃん、お帰り・・・あ、孝介！今の手は卑怯だろう！！」

「ふん。戦場に掟はあってないようなものだ・・・お帰り、駿介。裕介、俺を呼び捨てとはいいい度胸だな。」

「・・・どうやら、勝負のクライマックスで帰ってきてしまったらしい。」

間もなく、勝負は兄・孝介の圧勝で終わった。

「ところで駿介。お前、どこ行ってたの？」と勝負を終えた兄がお茶をすすりながら俺に聞く。

「・・・ちよっと、予備校に用事があった。」

「ほお。その割りにお前のカバンは軽そうだな」

「今日は、パンフをもらいに行っただけだから」

「ふうん・・・」明らかに、兄は怪しんでいる。

「なんか、駿兄ちゃんのカバンから甘いにおいがする！！」と裕介がいつのまにか俺のカバンの近くで言い出す。あいつの鼻は犬並みか！！

「そんなわけないだろ。ちゃんと袋に」ヤバいと思ったときには、兄さんが「さあ、出したほうがいいぞ」とニヤリと笑った。

俺はしぶしぶと武内さんからもらったケーキを二人の前に出した。袋からケーキを出すと、チョコレートと紅茶の香りがする。

「おおー、うまそう！！駿兄ちゃん、これどうしたの??」裕介は興味しんしんで聞いてくる。

「どうみても女の子からだよなあ、これ。無愛想な駿介がねえ」とニヤニヤする孝介兄さん。

「……先輩の妹さんを専心祭で案内したら、お礼にもらったんだよ」

「先輩って?」

「今年の剣道部部长の武内聡太先輩だよ。」

「武内……そういえば、弟の聡太は剣道部だったな。」孝介兄さんがぼそりと言った。

「そうだけど、兄さんは伊織さんを知ってる?」そういえば、兄も専心館だから伊織さんと同級生か。

「伊織とは3年間同じクラスで友達だからな……おまえ、伊織の妹に手を出したのか」

一 3. その頃の内藤家。 一 1 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

駿介兄・孝介と伊織につながりが! ビバ!! ご都合主義!! (作者の居直り)

書いているうちに、こうなってしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8095y/>

Approach with one step ,two steps, three steps

2011年12月4日10時45分発行